

# 成人期前期のがんサバイバーが抱える問題と看護介入の検討

## ～がんサバイバーシップの視点から～

キーワード がんサバイバーシップ、成人期前期

水谷優一（北入院棟3階）

### I. はじめに

私は、血液腫瘍疾患患者の看護を行う中で、育児を行っている成人期前期の患者は、家族と過ごす時間の不足やコミュニケーションの不足が患者の心理的側面に与える影響は大きいと感じていた。血液疾患における化学療法中の患者の困っていることや思いについて研究しているものは少ない。栗山ら<sup>1)</sup>の研究は、65歳～85歳の成人期後期を対象に化学療法中の患者の生きたい、治したいという思いとその裏にある再発の不安や死に対する恐怖を明らかにしている。しかし、成人期前期では治療上・身体上の症状の他に、長期入院による経済的・社会的負担があり、その後の生活に与える影響も大きいと推察できる。

そこで私はインタビューを行い、成人期前期の血液腫瘍疾患患者が抱える症状・思い・社会的背景を明らかにし、がんサバイバーシップの概念から治療中・退院後の生活を意識した看護介入を検討したため、報告する。

### II. 研究目的

血液腫瘍疾患で成人期前期の患者が抱えている特有の問題と思いを明らかにし、分析・検討し、より良い看護介入を目指す。

### III. 用語の定義

成人期前期：25～45歳<sup>2)</sup>

がんサバイバーシップ：がんと共生し克服し、それとともに生き抜いていくという経験であり、生きるためのプロセスである。<sup>3)</sup>

### IV. 研究方法

1. 対象：血液腫瘍疾患患者で育児を行っている成人期前期の男性患者1名。
2. 研究期間：2015年8月～12月
3. データの収集方法：入院中の患者に半構成的面接を行い、日々の看護・看護記録から情報収集を行った。

### V. データの分析方法

半構成的面接は質問者と記録者の2名で行い、面接記録からグランデットセオリーアプローチに基づき、キーワードを抽出する。更に類似性のあるものをサブカテゴリー化し、更にそれを統合しカテゴリーとした。

### VI. 倫理的配慮

当院看護部倫理委員会の承認後、対象者に研究の趣旨と目的、参加は自由意思であること、プライバシーの保護について口頭と紙面で説明し、同意を得た。インタビューガイドは先行文献を参考に作成。プライバシー保護のため静かな個室にて行った。

### VII. 事例紹介

対象患者：A氏 20代 妻子（1歳）あり

診断名：急性リンパ性白血病

現病歴：平成27年5月より微熱と全身の関節痛出現し近医を受診。血液腫瘍疾患疑われたため当院受診。上記診断で入院し化学療法開始となる。1クール目の化学療法終了し一時退院。その後、2クール目の加療のため8月31日入院し、9月2日より化学療法開始。正常造血の回復後、10月6日インタビューによる調査を行い、10月7日退院となった。今後、他院で同種幹細胞移植予定となる。

### VIII. 結果

1. がんサバイバーの抱えるネガティブ要素  
がんサバイバーにインタビューを行った結果ネガティブ要素として【治療上の身体的・心理側面】【社会的役割の不足】【家族役割の不足】の3つのカテゴリーと10のサブカテゴリーが抽出された。（表1）

以下、生成されたカテゴリーを【】、サブカテゴリーを<>、データを「」で示す。

【治療上の身体的・心理的側面】では5つのサブカテゴリーが存在し、<疾患に対する

困惑><治療上の苦痛><治療予定の不確かさ><医療連携上の不安><看護上の不満と理解>である。<疾患に対する困惑>では「最初冗談かと思った。」「専門的なことを細かく言われて分からず、文章でもらったら分かった。」のように疾患に戸惑い、説明に対して十分に理解できていない状態で治療を開始していることが明らかとなった。<治療上の苦痛>では、「化学療法の際の吐き気と熱とだるさがきついですね。」と化学療法に伴う副作用症状が苦痛として明らかになった。<治療予定の不確かさ>では、「治療状況で変わると思うがおおよその日程を聞きたい。」と化学療法・移植に対し、治療日程の見当がつかないことでストレスに感じていることが明らかとなった。<医療連携上の不安>では「転院先の病院にまだ今の自分の症状や治療状況は伝えられていないらしい。」と同種移植予定のドナーから転院先の情報を聞き、気がかりとなっている現状が明らかとなった。<看護上の不満と理解>では、「ナースコールで呼んでも遅いときがある。」「忙しそうだから相談できずにいる。」と看護師への理解とともに遠慮から相談できない状況にあることが明らかとなった。

【社会的役割の不足】では、3つのサブカテゴリーが存在し、<将来設計の変化による衝撃><経済的負担><社会的孤立>である。<将来設計の変化による衝撃>では、「子供ができなくなるって聞いてどうしようかと思った。」「3人くらい欲しかった。」といった化学療法に伴い家族設計や今後の人生設計の変化が明らかとなった。<経済的負担>では、「保険に入るか考えているところだったので、はじめはがん保険のCMを見るだけでも嫌でチャンネルを変えていました。」と経済的負担による不安や悔しさが明らかとなった。<社会的孤立>では、「現在は休職しています。」「ここ1カ月は連絡ないですね。」と職場から離れ孤立している状況が明らかとなった。

【家族役割の不足】では、2つのサブカテゴリーが存在した。<親役割の不足>では、「子供に会えないことが苦痛。」「入院している間に1人で立ちやいましたからね。成長を見てあげたいです。」と親としての役割が不足して苦痛と感じていることが明らかとなった。<家族の動揺>では「妻ははじめ白血病=死と思っていたみたいで泣いていました。」と家族の反応が明らかになった。

## 2. がんサバイバーの抱えるポジティブ要素

次にインタビューを行った結果ポジティブ

要素として【治療に対する姿勢と期待】【ニードに対する姿勢と努力】【家族・職場の支援】の3つのカテゴリーと、8つのサブカテゴリーが抽出された。(表2)

【治療に対する姿勢と期待】では、2つのサブカテゴリーが存在した。<疾患に向き合う姿勢>では、「携帯や看護師さんからもらった資料で少しずつ知識を増やしている。」といった疾患による混乱の中で疾患と向き合い努力する姿勢が明らかとなった。<治療への期待>では、「仕事に復帰したい。」「全部の治療が終わったら旅行に行こうって話していません。」と治療に対する期待と今後の自身の目標を設定していることが明らかとなった。

【ニードに対する姿勢と努力】では3つのサブカテゴリーが抽出され、<精神的安寧><育児に参加する姿勢><看護師のサポート>である。<精神的安寧>では、「一番は一時退院の時ですね。子供と会えるし、遊べる。あと病院では出ない食事とかが食べられるので。」といったストレスをコーピングする要因について明らかになった。<育児に参加する姿勢>では、「子供が顔を忘れないようにテレビ電話をしています。」と育児に参加し少しでも役割として存在しようとする姿勢が明らかとなった。<看護師のサポート>では、「先生から言われたことをかみ砕いて説明してくれるから助かります。」と看護師のサポートが機能していることが明らかとなった。

【家族・職場の支援】では、3つのサブカテゴリーが抽出され、<親族のサポート><経済的サポート><職場のサポート>である。<親族のサポート>では、「妻が支えです。きつい時も電話やメールでやりとりしているの。」「(育児)実家にいるので問題ないです。3人だったら大変でしょうけど。」といった家族の支えがA氏の支えとして存在していることが明らかとなった。<経済的サポート>では、「傷病手当と親からの工面で何とかしている。」と現在のサポート状況が明らかとなった。<職場のサポート>「入院するときにはがんばれって。帰ってくる場所はあるよと。」「妻が職場に書類のことで連絡するので、いつ面会できるか尋ねられたみたいです。」と職場の理解と妻が職場との架け橋のような役割を担っていることが明らかとなった。

## IX. 考察

今回の調査で、診断から治療までの期間が短い血液腫瘍疾患において、【治療に対する困惑】のように患者は混乱しており、疾患・治

療経過や内容といった説明に対して、十分に理解できていない状況で治療に臨んでいる現状があった。また、治療開始後〈疾患に向き合う姿勢〉のように、少しずつ疾患と向き合い、知識獲得のための努力を行っていた。しかし、〈治療上の苦痛〉や〈治療予定の不確かさ〉といった避けることのできない苦痛や問題に直面しつつ、治療と向き合い・期待し、自らのニーズを満たすべく対処行動を獲得することで、相互作用しながら治療を継続していることが明らかとなった。さらに、成人期前期の特徴として【社会的役割の不足】【家族役割の不足】のように、入院や治療によって社会的役割や家族役割を十分に発揮することができない状況に対して、消えることのない悩みを抱えていることが明らかとなった。しかし、こうした悩みは【家族・職場の支援】で挙げられたようにA氏を支え、解決に導くことができずとも悩みの軽減につながっていた。こうした氏の状況をがんサバイバーシップの視点から(図1)として表すことができた。野村らは「家族や友人から受ける愛情や精神的な支えの中にあるものは、積極的に前向きに意欲を高め、期待や希望へとつなげていくことができる。」<sup>4)</sup>と述べている。家族の面会や電話で感情を共有できていたことは、A氏にとって何よりの支えであったと考えられる。〈家族の動揺〉で挙げられた家族の反応も患者へ影響を与えるため、家族の反応や患者をサポートする環境について情報収集を行い、家族・サポート環境も看護の対象として支援していくことの必要性を強く感じた。

近藤らは化学療法を受ける治療期にある患者について「化学療法を受ける治療期でサバイバーは、副作用や生活上のさまざまな問題などに直面し、対処し、折り合いをつけながら自らが成長する過程を体験する。この過程において避けられないのは副作用症状への看護とサバイバーのセルフケアに関する支援である。」<sup>3)</sup>と述べている。今回の調査は2クール目の入院で患者と看護師が一定の関係性を築くことができた中、退院直前の副作用症状の落ち着いた時期に行ったため、多くの情報を得ることができた。しかし、治療中は副作用や症状の出現に対する不安から多くの情報を得ることは困難である。化学療法を行う患者は長期間にわたり入退院を繰り返すため、一度に多くの情報を得るのではなく、治療前・退院時・副作用症状の程度を考慮し患者から少しずつ情報を得る他、家族から情報が

得られる関係性を築いておくことが重要であると考へた。さらに、近藤らは「化学療法は長期間に及ぶため、揺れ動くサバイバーの気持ちに寄り添い、いつでも相談できる環境を整え、患者－看護職者間のケアリングとパートナーシップが重要である。それはサバイバーを見守る家族に対しても同様である。」<sup>3)</sup>と続けている。本事例においても避けることのできない副作用症状などには制吐剤や食事指導、生活上の指導などで対応してきた。しかし、患者個々が抱える問題や患者家族の抱く気持ちに寄り添い、いつでも相談できる環境・患者－看護職者間のパートナーシップの関係性に対する介入が不十分だったのではないかと感じ、看護を行う上で必要な介入であると認識することができた。

## X. 結論

① A氏の現状をがんサバイバーシップの視点から図1のように表すことができた。

② 成人期前期の特徴として、将来設計の変化・経済的負担・子供の成長を見たいという【社会的役割の不足】【家族役割の不足】を抱えていることが明らかとなり、それらを軽減する要素として家族によるサポート環境の重要性を認識することができた。

## XI. おわりに

成人期前期の血液腫瘍疾患患者に対し、患者・家族・看護者が互いに抱えている思いを共有できるよう患者に寄り添い、患者－看護職者間のパートナーシップを意識した看護介入が必要であった。今後の看護介入に取り入れて行っていきたい。本研究は1事例を対象とした事例研究であり、がんサバイバー・成人期前期の特徴として今後も研究を継続し、データを積み重ねていく必要がある。

### 引用文献

- 1) 栗山かおり, 坂上智美, 柳田麻紀, 栗原しのぶ: 血液疾患で化学療法中の患者の思いを知る第44回日本看護学会論文集 成人看護II, 35-38, 2014
- 2) 二宮克己, 大野木裕明: ガイドライン発達心理学, 株式会社ナカニシヤ出版, 2014
- 3) 近藤まゆみ, 嶺岸秀子: がんサバイバーシップ がんとともに生きる人びとへの看護ケア, 医歯薬出版株式会社, 2006
- 4) 野村妙子, 高橋裕美, 笹尾美佳, 他: 癌告知を受けた患者の心理から看護師の関わりを考察する-婦人科悪性腫瘍の手術後の面接より-第36回日本看護学会論文集(看護総合)p.484-486, 2005.

表1 がんサバイバーの抱えるネガティブ要素

カテゴリー	サブカテゴリー
治療上の 身体的・心理側面	疾患に対する困惑
	治療上の苦痛
	治療予定の不確かさ
	医療連携上の不安
	看護上の不満と理解
社会的役割の不足	将来設計の変化による衝撃
	経済的負担
	社会的孤立
家族役割の不足	親役割の不足
	家族の動揺

表2 がんサバイバーの抱えるポジティブ要素

カテゴリー	サブカテゴリー
治療に対する姿勢と期待	疾患に向き合う姿勢
	治療への期待
ニーズに対する 姿勢と努力	精神的安寧
	育児に参加する姿勢
	看護師のサポート
家族・職場の支援	親族のサポート
	経済的サポート
	職場のサポート

図1 がんサバイバーシップの視点から捉えた氏の現状

